

カダグスターンからの手紙

Letters from Kadagstān

宮 本 亮 一

Ryoichi MIYAMOTO

Abstract The discovery of the Bactrian documents revealed that a region centered on the present Baghlān plain had been called Kadagstān since the latter half of the 4th century to the late 8th century, approximately. In this paper, I will address matters related to several documents written in this region. First, I will summarize the current status of research on Kadagstān. Next, I will present a different interpretation of the status of *kadag-bid*, which was the title of the governor of this region. Finally, I will suggest how to understand the term *παροαναγο*, seen only in the documents concerning *kadag-bid*. This word is usually understood as an abstract noun meaning “authority,” but I suggest the possibility that it may have been an “oral order” issued by the *kadag-bid* or a “deed” of the oral order dispatched from the *kadag-bid*.

Keywords Bactrian documents (バクトリア語文書), Tukhāristān (トハーリスターン), Kadagstān (カダグスターン), *kadag-bid* (カダグ・ビド), order document (命令文書)

はじめに

Nicholas Sims-Williams がバクトリア語世俗文書の解読成果を発表し始め、中世イラン語東方言の1つであるこの言語に関する研究が大きな転換点を迎えて以来、すでに20年以上が経過した。しかし、バクトリア語資料の理解は、未だSims-Williams ただ一人の研究成果に基づいているという状況である。筆者は、言語学的な研究とは別に、資料を利用して歴史研究を行う者が、文書の解釈に関する提案を行うことで、資料全体に対する理解を向上させることができると考えている¹⁾。こうした考えのもと、本稿ではカダグスターンと呼ばれる地域に関わる文書を取り上げ、新たな解釈の可能性を提示する。まずは、この地域に関わる情報を整理し、次いでこの地域の管轄者カダグ・ビドの立ち位置について考察する。そして最後に、そのカダグ・ビドから発せられた命令書に見える *παροναγο* という単語の理解について、筆者の見解を述べる。

I カダグスターンの起源

バクトリア語の世俗文書が我々にもたらした新たな情報のうち、前イスラーム時代の歴史との関連で最も興味深いのは、カダグスターンに関わるものだろう²⁾。吉田豊が「中原」に例えるこの地域についての情報をまとめると、次のようになる [吉田 2013: 46-47]。

- ①バグラーン平原を中心とする地域が「(王)家の土地」を意味する「カダグスターン (*καδαγοστανο*)」と呼ばれていた³⁾
- ②当地域の名前がサーサーン朝後期の印章に現れる⁴⁾
- ③当地域の支配者が「カダグ・ビド (*καδαγοβιδο*)」という肩書を帯びていた
- ④当地域の支配者が「カダグ (の人々)の王 (*καδαγο βανο*)」と名乗っていた
- ⑤「カダグ・ビド」は4世紀後半から8世紀後半まで、地名「カダグスターン」と「カダグの王」は5世紀後半～8世紀後半まで文書の中に存在を確認できる
- ⑥「カダグ・ビド」の出現 (380年) と同時にバクトリア語文書の中にギリシア文字で表記された中期ペルシア語の月名が現れる (483年まで継続)

1) 筆者は以前、Sims-Williams が「まち (city)」と訳す *παγο* という言葉に対して、これを「州 (province)」と訳す案を提示したことがある [Miyamoto 2019: 166 n. 7; 宮本 2020: 103 n. 24; cf. BD II: 284a]。

2) バクトリア語資料とそれらの研究概要は、Sims-Williams 1997; idem 2012c; 吉田 2013 を参照。

3) カダグスターンの場所がバグラーン平原に特定されたのは、これ同時に言及される Warlu (**σαρλο<σαρλογανο*) という地域名が、吉田によって漢文資料に現れる大汗 (太汗) 都督府の「活路」城に比定されたことによる [Yoshida 2003: 158b]。

4) カダグスターンの名を記す印章も含め、サーサーン朝期の印章に関する総合的な研究として、Gyselen 2019 を参照。

Sims-Williams は当初、4 世紀後半になって突如としてカダグ・ビドの称号と中期ペルシア語の月名が出現した理由を、この時期にサーサーン朝によって新たな支配構造が導入されたためと考えていた [Sims-Williams 2008a: 98-99; idem 2009]。

しかし最近になって、彼はこの考えを放棄し、カダグスターンの起源が4 世紀後半より遡るという仮説を新たに提示した [Sims-Williams 2020: 237-239]。彼はまず、中期ペルシア語の月名が現れる4 世紀後半から5 世紀後半の文書のほとんどが、カダグスターンで書かれたものであり、この間もローブで書かれた文書ではトハーリスターンのローカルな月名が使用されていたことを提示した⁵⁾。そしてそれを根拠に、中期ペルシア語の使用は長らくサーサーン朝の王領であったカダグスターンに特有の現象であり、現存する文書が示す4 世紀後半～5 世紀後半の約100 年間の状況は、その最後の時期に属すると考えたのである。彼はその起源を明確に述べていないが、バグラーン平原の南東、プリ・フムリ近郊のラーゲ・ビービーで発見され、シャープール1 世(241～272)に比定されている巨大な浮き彫りをこの文脈の中に位置付けているので、かなり古い起源を想定している⁶⁾。Sims-Williams の新しい仮説には、特に否定すべき点は見当たらないが、一方で、筆者には、旧説を放棄しなければならないほど説得力があるようにもみえない。

クシャーン朝がサーサーン朝の攻撃によりヒンドゥークシュ山脈北側の領域を失った後、この地域はいわゆる貨幣学者の言うクシャノ・サーサーンによって統治されたと考えられている。詳細はほとんどわかっていないが、3 世紀から4 世紀後半の間に、7 人ほど(?)のクシャーン・シャーが存在し、彼らはサーサーン朝の王族であったとみられている [de la Vaissière 2016; Schindel 2016]。シャープール1 世の頃からバグラーン平原が王領であったとすると、クシャーン・シャーによる統治と王領との関係はどのように説明すれば良いのだろうか。クシャノ・サーサーン朝の貨幣製造所名としては、今のところバルフ、メルヴ、ヘラートが知られているので、トハーリスターンの南部では、バルフ辺りから西側をクシャーン・シャーが、東部地域をカダグスターンの支配者が管轄していたのだろうか⁷⁾。しかし今のところ、ラーゲ・ビービーの浮き彫り以外に、4 世紀以前にバグラーンがサーサーン王領であったことを示唆する資料は存在しない。もちろん、カダグスターンで発行されたサーサーン王の貨幣も知られていない⁸⁾。次節で見ると、バクトリア語の手紙において、ク

5) バクトリア紀元については、Sims-Williams & de Blois 2018 を参照。彼らが考えるこの紀元の開始年(223 年)に対して、Schindel 2011; de la Vaissière 2018 は227 年開始説(カニシュカ紀元第2 世紀の始まり)を唱えている。そして、これらの異見に対して、改めてSims-Williams は自説の正当性を主張している [Sims-Williams 2020: 231-235]。本稿ではSims-Williams & de Blois の換算に従う。

6) この浮き彫りについては、Grenet et al. 2007 を参照。

7) トハーリスターンを東西に分けて考えることについては、桑山 1990: 399-411 を参照。

8) ホスロー1 世(531～579)の治世3 年に発行された貨幣には、カダグスターン(ktkstn)を表す可能性のあるKTの略号を持つものが知られているが、Rika Gyselen は、サーサーン朝と突厥が同盟を結ぶ前にこの地域で王朝の貨幣が発行されたと考えることは難しいとしている [Gyselen 2018]。

シャーン・シャー（あるいはその一族）とカダグスターンの統治者であるカダグ・ビドが差出人の手紙だけが採用する書式があり、両者の連続性が見て取れる。よって、もともとバグラーンに拠点を構えていたのはクシャーン・シャーであり、トハリスターンにおける実質的な支配者が、4世紀後半にクシャーン・シャーからカダグ・ビドへと交代したと推測することも不可能ではないだろう。

アンミアヌス・マルケリヌスの記述からは、350年代、サーサーン朝のシャープール2世（309～379）が、王朝の東方領域に現れたキオニタエなどの遊牧集団と対峙し、最終的にはそれらの集団と同盟を結び、対ローマ戦役に従軍させたことが知られている⁹⁾。東方における同王の積極的な活動の結果、それまでクシャーン・シャーが統治していた地域が王の直轄領となったため、カダグスターン「(王)家の土地」と呼ばれるようになり、そこを管轄する者としてカダグ・ビドが置かれた、という筋書きも荒唐無稽ではないだろう¹⁰⁾。

筆者はかつて Sims-Williams の旧説を支持し、4世紀後半頃にカダグスターンが出現した歴史的背景をやや詳しく検討したことがあった [宮本 2012; 同 2014: 94-103]。筆者は依然として、山脈以北におけるサーサーン朝の状況が不明確なシャープール1世の時代にカダグスターンの起源を求めるよりも、4世紀後半に状況が変化したと考える方が良いのではないかと考えている。しかしいずれにしても、中期ペルシア語の月名を持つさらに古い文書が新たに発見されない限り、この問題は解決されないだろう。

II カダグ・ビドの地位

カダグスターンの統治者であったカダグ・ビドの地位に関して、吉田の極めて重要な研究がある [吉田 2013: 58-60]。これによれば、バクトリア語文書の中にはカダグ・ビドからの手紙が10点（文書 cr, da, db, dc, dd, de, ea, ed, ja, Y）あり、それら全ての冒頭で、差出人の名前が先に書かれる書式 $\alpha\sigma\theta \sim \alpha\beta\theta \dots$ 「～から…へ」が採られている。そして、同様の書式は、他にはクシャーン・シャー（あるいはその一族）から出された1点の手紙（文書 ba）にしか見えず、在地の支配者 khār であってもこの書式を用いなかった。このことはカダグ・ビドの地位がクシャーン・シャーに比肩する極めて高いものであったことを示している¹¹⁾。

⁹⁾ 2019: 115b)。

9) アンミアヌス・マルケリヌスの記述については、山沢 2017 を参照。近年、キオニタエ、キダーラ、エフタルなど、中央アジアから南アジアにかけて展開したフン系集団の動向に関わる資料が1冊にまとめられており便利である [Balogh 2020]。

10) その後、クシャーン・シャーの称号は中央アジアに到来したフンの一派が使用した。キダーラ期のものとされる印章の銘文を参照 [ur Rahman et al. 2006]。

11) 文書 ba は、BD II: 52-55 を参照。差出人の地位が高い場合に前置詞 $\alpha\sigma\theta$ が先に来る書式を採用すること自体は、Sims-Williams が先に指摘していた [Sims-Williams 2006: 703]。トハリスターン

一方、Sims-Williams は、カダグ・ビドの地位について、彼らは王として独自の権利を有していたが、それと同時に、最上位の支配者 (overlord) よりも下位の存在であったとする。そして、その最上位の支配者とは、ペーローズの時代まではサーサーン朝の諸王の王、その後はエフタルのヤブグやテュルクのカガンであったとする [Sims-Williams 2020: 237-238]。彼の考えには根拠となるバクトリア語文書があるので、それらのテキストと翻訳を引用してみよう。いずれも、手紙・文書の差出人を記した部分である。なお、Sims-Williams はカダグ・ビドを “governor” と訳している。

文書 ea (461/462 年), ed (475 年)

μηαμο ναμοοινδ(α)δο αβξοδο πρωζο φανανοφαιο καδαγοβιδο καδαγανο φαιο

“Meyam, the king of the people of Kadag, the governor of the famous (and) prosperous king of kings Peroz” [BD II: 108-109, 114-115]

文書 ja (485 年頃¹²⁾)

κιλιμανο ναμοοι[νδα]δο αβξοδο ηηβοδαλο ι[α]β[γο]καδαγοβι[δο κα]δαγανο φαιο

“Kilman, the king of the people of [Ka]dag, the governor of the famous (and) prosperous *yab[ghu]* of Hephthal” [BD II: 124-125]

文書 Y (771/772 年)

κηρανοτογγανο τογγανοσπαρανο ναμοοινδαδο αβξοδοφαρανο χαγανο καδγοβιδο καδγανο φανο

“Kera-tonga Tonga-spara, the king of the people of Kadag, the governor of the renowned *qaghan*, prosperous in glory” [BD I²: 142-143]

一見してわかるように、これらの人名と肩書等の並びはほとんど同じ構成である。よって、文書 ea, ed を上のように翻訳 (解釈) した場合、自ずと残る 2 点も上のような解釈となり、カダグ・ビドは常に誰か別の支配者の下位にあったという考えに至る。確かに、文書 ea, ed に関しては Sims-Williams と異なる解釈は難しい。しかし残る 2 点はどうか。

すでに吉田が指摘しているように、文書 Y のカガンはカダグ・ビドと同格の可能性があり [吉田 2013: 54 n. 34]。つまり上の翻訳は、“Kera-tonga Tonga-spara, the king of the people of Kadag, the governor, the renowned *qaghan*, prosperous in glory” とすることも可能なのである。そうなると、同じく文書 ja も、“Kilman, the king of the people of [Ka]dag, the

¹²⁾ ンの在地支配者 *khār* については、宮本 2018a を参照。

12) この文書の年代については、Sims-Williams & de Blois 2018: 72-73 を参照。

governor, the famous (and) prosperous *yab[ghu]* of Hephthal” と翻訳し、エフタルのヤブグがカダグ・ビドの肩書を帯びていたと考えることが可能となる。ここではこれらの解釈について、古い方から少しずつ考えてみたい。

エフタルのヤブグは他の手紙（文書 eh, jb）にも言及されている。これらの文書からは、トハーリスターンの在地の領主であるローブの *khâr* が、エフタルのヤブグの配下にあり、「エフタルの君主の書記（*ηβοδαλοχοηοαγγο λαβρο*）」や「トハーリスターンとガルチスターンの裁判官（*τοχοαραστανο γαρσιγοστανο λαδοβαρο*）」と呼ばれていたことがわかる¹³⁾。吉田はこれらの肩書を、エフタルの最高権力者が在地の支配者に与えた尊称であったと考えている [吉田 2013: 57]。しかし、エフタルは依然として謎多き集団であり、最高位の支配者がヤブグであったのか、それとも別の称号を持っていたのか、また、最高位の支配者が 1 人であったのか複数であったのかなど、解明されていない問題が多い。

ところで、近年の貨幣学は、文献が単にエフタルとして記す勢力の内部には、共通の祖先を持つ異なる 2 つの集団が存在したと考えている¹⁴⁾。最初期の貨幣に見えるバクトリア語の銘文に基づきアルハンと呼ばれる集団は、ヒンドークシュ山脈の南側で、シャープール 2 世、あるいは 3 世（383～388 年）の金型を利用して貨幣の製造を開始したと考えられているので、その活動開始時期は 4 世紀末頃となる。その後、集団は特徴的な尖頭を持つ首領を描いた独自の貨幣を発行し始める。一方、貨幣学者は、バクトリア語でエフタル（*ηβ/ηβο/ηβοδ<ηβοδαλο*）の銘文を持つ貨幣を発行した集団を、「真エフタル」と呼び、貨幣製造所名のバルフが知られていることから、その存在を山脈の北側に位置付ける。貨幣の大部分はペーローズ（457～484 年）の模造貨であり、集団の台頭は 5 世紀後半以降と推測される¹⁵⁾。またこの集団は、杯を持った首領の姿を描いた独自の貨幣も発行している¹⁶⁾。

アルハンと真エフタルの貨幣発行開始時期には 100 年弱の差があり、両者の関係をどのように考えるかは非常に難しい問題である。しかし筆者は、アルハンがヒンドークシュ山脈の北側に進出し、その中から真エフタルが台頭した、あるいはアルハンとは別に後から勃興

13) BD II: 122-123, 126-127。この部分の翻訳は吉田の指摘に基づき改訂されている [Sims-Williams & de Blois 2018: 131-132; Sims-Williams 2020: 242 n. 37]。

14) Alram & Pfisterer 2010; Alram 2014; idem 2016; アルラム 2017; Vondrovec 2014。貨幣学者は、両集団の貨幣に共通のタムガが見られることから、彼らが共通の祖先を持つと考えており、これは、いわゆるエフタルやキダラなどの起源となった集団が、4 世紀中頃にアルタイ山脈付近を離れ南下したフン（匈奴）であるとする Étienne de la Vaissière の考えとも合致する [de la Vaissière 2005; idem. 2007]。

15) これを裏付けるように、中国資料では 456 年以降に嚙嚙の遣使が記録される。また、バクトリア語文書には、文書 I (483 年)、文書 li (483 年)、J (517 年) に「エフタルの税（*ηβοδαλαγγο τωρο*）」が言及される [BD I²: 44-55]。

16) アルハンの貨幣がサーサーン朝の模造を経て独自のものに至ったことを考慮に入れば、真エフタルの独自の貨幣もペーローズの模造貨より後の時代に発行されたと考えるのが自然である。しかし、この貨幣の裏面に描かれた胸像はバフラーム 5 世（420～438 年）をモデルにしていると考えられており、こちらの方が古いのかもしれない。

した真エフタルが南側のアルハンを吸収した、といった過程を経て、最終的には山脈の南北にまたがる巨大な政治的連合体のようなものが形成され、それが文献で「エフタル」と呼ばれたのではないかと想定している。というのも、中国の典籍や後世のアラビア語年代記は、エフタルの支配領域として、トハリストーン、ソグド、タリム盆地西側のオアシス諸都市に加え、罽賓やカープリスターンのように山脈南側の地域名も挙げているからである¹⁷⁾。そして、519～520年、バグラーン平原と西北インドを訪れた宋雲は、それぞれの地域に嚙嚙(=嚙嚙)がおり、その支配領域は、南は牒羅(恐らくザーブル)、北は勅勤(or 勅勒)、東は于闐、西は波斯に及んだと述べる¹⁸⁾。

これを踏まえた上で、カダグ・ビドと「エフタル」の関係について考えるなら、有名な Schøyen コレクションのサンスクリット語銅板銘文(492/3 or 495/6年)の地理的背景をヒンドゥークシュ山脈の北側に置く説が重要となる [Melzer 2006]。仏塔の寄進に際して奉納されたこの銅板の主たる寄進者(名前は欠損)は、Tālagāna の天子・王 (tālagānikadeva-putraśāhi) という称号を持ち、この Tālagāna をクンドゥズの東のターラカーンと考える説がある¹⁹⁾。また、この人物やその家族・関係者と共に名前が挙げられている4人の王 (Kṃṅgīla, Toramāna, Mehama, Javūkha) は、基本的にアルハン型の貨幣を発行した支

17) ここで言う中国の典籍とは『魏書』『梁書』『通典』など、アラビア語年代記とは、ディーナワリー『長き物語の書 (Kitāb al-Akhbār al-Ṭiwāl)』、および無名著者『ペルシアとアラブの歴史における究極の目的 (Nihāyat al-Arab fī Ta'rikh al-Furs wa al-'Arab)』などを指している。これらの文献は Balogh 2020 で確認できるが、『ペルシアとアラブの～』はそこに収録されていない。

18) 牒羅をザーブルに比定する考えは多くの先行研究において疑問符付で採用されている(例えば、榎 1955: 113; 桑山 1993: 423 など)。他に知られているザーブルを写した漢字の中には、牒羅と類似の形は見られないが、積極的な代替案もないため、本稿でも従来の説に従っておく。ザーブルを写した様々な形については、吉田がまとめている [桑山 1998: 135-139]。勅勤と勅勒というヴァリエントについては、ひとまず Ching apud Balogh 2020: 65 を参照。

19) Sims-Williams apud Melzer 2006: 256。この考えは、仏塔が建てられた村の名前 śārḍiysa をバクトリア語の地名と考える吉田の説によっても補強される [吉田 2013: 60 n. 47]。これに対して、de la Vaissière は Tālagāna をパンジャーブのソルトレンジにある Talagang に比定する案を提示し、それ支持した Hans Bakker は、śārḍiysa が、サンスクリット語 śārada/śāradiya 「秋らしい」を經由し、Shardi という村の名前で現在もカシミールに残っていると主張した [de la Vaissière 2012; Bakker 2018]。確かに、このような立派なブラーフミー文字・サンスクリット語で書かれた金属板銘文は山脈の北側で発見されておらず、この点は、この銘文を西北インドという地理的文脈の中で理解する際に有効である。しかし、Tālagāna の所在地をトハリストーンのターラカーンに求める際に不利となるこの問題は、金属板の作成場所と奉納場所が別であったと考えれば解決できるのではないかと。稲葉穰が述べるように、4人の王が山脈の南北に並存したとする考えは、宋雲が取ったルートと見事に合致している [稲葉 2011: 69 n. 1]。また、Oskar von Hinüber の助言を受け Bakker が再構する śārḍiysa の当時の発音 Śārḍiysa は、むしろ、この地名がイラン語の diz 「城砦」を含むとする吉田の考えを補強するようにみえる [Bakker 2018: 13]。よって、現時点で筆者は de la Vaissière と Bakker の説を採らない。なお、小谷伸男は、この銘文の研究状況を整理し、ザールデリーの仏塔との関連を想定している [小谷 2019]。また、Cristina Scherrer-Schaub は、同碑文を用いて仏教学的な研究を行っている [Scherrer-Schaub 2018]。

配者として知られているが、Mehama の貨幣には、クシャーン金貨の流れを汲む、山脈の北側で発行された杯状貨幣が存在する [Vondrovec 2014: 142-144, 153]。さらに Mehama に関しては、この王の治世に銅板が作製されたことが明記されている上、この名前は、先に挙げたバクトリア語文書 ea と ed でカダグ・ビドの称号を帯びていた Meyam と同じと考えられている²⁰⁾。資料の年代が 20~30 年離れているため、文書の Meyam と銅板の Mehama が同一人物であったとは断言できないが、祖父と孫が同じ名前を持つことが多いこの地域の命名方法を考えれば、少なくとも両者が血縁関係であったと考えることは十分可能である²¹⁾。

貨幣を発行し得る「エフタル」の支配者の 1 人 Mehama (あるいはその祖父) が、カダグ・ビドの Meyam であったなら、同じカダグ・ビドの Kilman (文書 ja) も「エフタル」の支配者の 1 人であり、ヤブグを名乗っていたと考えることができる²²⁾。カダグ・ビドとエフタルのヤブグを同格とみなさない場合、貨幣を発行し得る支配者よりも上位の存在としてヤブグがいたことになるが、そのような状況は想定しにくいのではないかと²³⁾。

次に、文書 Y はどうか。カガンをカダグ・ビドの上位者と考えるか、両者を同格とみなすか、どちらを採るにしても、770/771 年の「カガン」が誰であったのかを考えねばならない。この文書に最も近い時期に、カガンの称号を持った者が直接トハーリスタンに到来したのは、8 世紀前半に活動したテュルギシュの蘇祿である²⁴⁾。738 年に蘇祿が暗殺されて以降、テュルギシュは内訌状態に入り衰退し、766 年までにはカルルクがテュルギシュに取っ

20) Sims-Williams 2010: no. 244, cf. nos. 246, 247。4 人の王の名前が併記されていることは、彼らが同時に異なる地域を支配していたことを示唆する。一方、de la Vaissière は、これらの諸王が統治した年代順に言及されていると考え、最初の 2 人はすでに死去していたと想定している [de la Vaissière 2012: 128]。もちろんその可能性は否定できない。しかし、この時代のもと考えられている大英博物館所蔵の銀器には狩猟を行う 4 人の支配者が描かれており、キダーラやエフタルの時代に複数の王が併存していた可能性を示唆する。この銀器については Grenet 2002: 211-212 を、銀器の銘文の新しい読みについては、Bakker 2020: 43-47 を参照。大英博物館のサイト (https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1963-1210-1) で銀器の鮮明な画像を確認することができる (2021 年 4 月 23 日閲覧)。

21) ただし、両者が父子の可能性も皆無ではない。なぜなら、バクトリア語文書には、文書 C の Yamsh-spal、文書 V の Zar-yol のように、同名の父子が登場するからである [BD I²: 32-33, 116-117; Sims-Williams 2010: nos. 147, 171]。もちろん、Meyam と Mehama が無関係という可能性も排除できないが、注 19 に記した通り、筆者は今のところ Meyam/Mehama の活動地域を共に山脈の北側と考えており、現時点ではこの可能性は考慮に入れない。

22) Kilman の語源は判明していない [Sims-Williams 2010: no. 214]。しかし、この人名の後半部分 (-mano) は、フン系貨幣の発行者として知られている Adomano や、有名なトラーマーナの後半部分と同じ要素と思われる [ibid.: nos. 9, 476]。

23) 現在のところ、ヤブグの銘を持つ「エフタル」の貨幣は知られていないが、ヤブグと読めるかもしれないバクトリア語の銘文を持った印章は存在する [Lerner & Sims-Williams 2011: 83-84, 181]。なお、アルハンの王 Javūkha の名前とヤブグとの類似性は大きくないようだ [Sims-Williams 2010: no. 139]。

24) 蘇祿以前のテュルギシュについては、内藤 1988: 305-362 を、蘇祿以降に関しては、前嶋 1971: 160ff を参照。また、Golden 1992 や Stark 2016 も参照。

て代わったとされる²⁵⁾。文書 Y はまさにこの直後の時期に当たるが、トハーリスターン方面にテュルギシュの残存勢力が存在し、カガンを名乗ったのかもしれない。あるいは、蘇祿の全盛期にカダグスターンの支配者が「カガンのカダグ・ビド」を名乗り、それが文書 Y の時代まで利用され続けたという可能性も想定できる。

文書 Y が書かれた 770/771 年に中央アジアの西側で強勢を誇ったのは先のカルルクであった。普通、この集団はヤブグに率いられ、カガン号を使用しなかったと考えられているが、セミレチエで発行されたソグド文字の銘文を持つカルルクの貨幣には、カガン (x'γ'n) と記されている²⁶⁾。また、この時代は東ウイグル可汗国の牟羽可汗 (759~779 年) の治世にあたる。この時代にトハーリスターンの在地の支配者が、カルルクやウイグルのカガンを宗主とみなしたという状況があり得ただろうか²⁷⁾。

しかしいずれにしても、文書 Y と同時代のアラビア語文書群からわかる通り、この地域ではすでにアッバース朝が徴税を行っていた [Khan 2007]。こうした状況下では、筆者には、カダグスターンの在地領主の上にさらにカガンの存在を想定するよりも、この地域でカガンを名乗っていた何者かが、カダグ・ビドの肩書も同時に帯びていたと考える方が良いように思われる。

以上のことから筆者は、カダグ・ビドの地位について、次のような可能性を考えておきたい。資料にこの肩書が現れる 4 世紀末からペーローズがエフタルに敗れるまで、カダグ・ビドはこの地域の実質的な支配者であったとはいえ、サーサーン朝の「諸王の王」を至上の君主として戴いていた。しかし、この地域がサーサーン朝の支配から離れて以降、カダグ・ビドの肩書は、バグラーン辺りに拠点を置いた集団の長が、先行する時代の肩書を伝統的に利用したもの、つまり一種の尊称や雅称となった²⁸⁾。上に挙げた 461/462 年の文書 ea 以降、カダグ・ビドが「カダグの王」と名乗り始めることも、カダグ・ビドの性質に変化が生じたことを示唆する²⁹⁾。

25) カルルクの西遷に関する詳細は、川崎 1993 を参照。

26) 吉田 2018: 160-161。バルアミー『歴史』の写本には、アル=ムカンナアがカルルク・ハーカーンに手紙を書いたという記述がある [Karev 2015: 188]。イスラーム時代の諸文献に見えるハーカーンについては、井谷 2011 を参照。

27) より新しい時代に建てられたカラバルガスン碑文には、懐信可汗 (795~808 年) の治世末期の出来事として、ウイグルと大食 (アッバース朝) との関係が記されており、可汗がホラーサーンや各地のアミール、そして王に命令を下したとある。詳しくは、吉田 2013: 55-57; 同 2019; 同 2020: 124ff; 森安・吉田 2019 を参照。この時代であれば、トハーリスターンの地方領主がウイグルの可汗を名目上の主とみなしても良いかもしれない。

28) これは、ヒンドウークシュ山脈北側のクシャーン朝が衰退した後、クシャノ・サーサーン朝、そしてキダーラが「クシャーン・シャー」の称号を利用したことと同じ現象と言えるだろう。キダーラがクシャーン・シャーの称号を利用したことは、注 10 で言及した印章、および貨幣の研究を参照 [Cribb 2010; Vondrovec 2014: 25-135, 140-141, 148-149]。

29) Meyam が「諸王の王ペーローズのカダグ・ビド」と名乗る文書 ea, ed は、ペーローズがエフタルに殺害される前のものである。しかし、すでに「カダグの王」を名乗っていることから、

III カダグ・ビドからの命令

1 παροαναγο

カダグ・ビドから出された手紙を見ると、半分の5点（文書 cr, dd, de, ea, ed）に *παροαναγο*（他に *παροαναγο*, *παροσηναγο* というヴァリエントもある）という単語が現れることに気づく。実は、この語は1点の例外（文書 ci）を除き、カダグ・ビドの手紙にしか現れず、後述するように、この文書 ci もカダグ・ビドと関連する可能性がある。Sims-Williams は、この単語を「権限付与、権限（authorization, authority）」と訳している [BD II: 252a]。例として、文書 cr のテキストと英訳を挙げてみよう（下線は筆者による）。

⁽¹⁾ *ασο κηραο ωρομοζδανο καδαγοβιδο αβο β[αβο οδαβο]* ⁽²⁾ *μυρ[ο]σπαλο οδαβ[ο] βανδαγο*
οδαβο οινδοσαναγο[οδαβ]ο ν[●●] ⁽³⁾ *οβανδαγο λροδο*
μισιδο λανηδο τω|τ|μαχο ασο [●●●] ⁽⁴⁾ *λαργο ζιο μμοβανδαγανο ιαο παρο σηλαγο*
τασκο[ι' οιο]πο ⁽⁵⁾ *οτο οιξαγγοδαρο μακιρηδο*
χρονο ρ' ν' ζ' μαο σ[] ⁽⁶⁾ *πανδαρομιδο σ[πι]ω λαβιρο παροαναγο[*
⁽⁷⁾ *αβο βαβο βαν* ⁽⁸⁾ *δαγο οινδοσαναγο* ⁽⁹⁾ *traces* ⁽¹⁰⁾ *]τασκο ι'*

⁽¹⁾From Keraw Ormuzdan the governor, to B[ab and to] ⁽²⁾Mir-spal and to Bandag and to Wind-sanag [and to] N[...]-⁽³⁻⁴⁾bandag, greetings.

Moreover, on account of the grain owed by/to the [...] -keeper Ziy Mirbandagan you should give all(?) the [ten] quarters of wine. ⁽⁵⁾And do not do otherwise.

Year 157, month ⁽⁶⁾Spandarmid. On the authority of S[pi]y(?) the scribe.

⁽⁷⁻⁹⁾To Bab, Bandag, Wind-sanag ...

⁽¹⁰⁾... ten quarters. [BD II: 98-99]

こうした短い文書を正しく理解することは難しいが、差出人 Keraw Orumzdan が受取人たちにワインを差し出すよう命じていることは間違いない。また、5行目に見える *οτο οιξαγγοδαρο μακιρηδο* “And do not do otherwise” という文言も、この手紙が一種の命令書であったことを示しているようにみえる³⁰⁾。

問題の *παροαναγο* という語を含む一文 (*σ[πι]ω λαβιρο παροαναγο*) は、手紙の本文の後に年月と共に記されており、“On the authority of S[pi]y(?) the scribe” と訳されている。

↘ Meyam は実質的なこの地域の統治者であり、ペーローズの支配はこの時点ですでに名目的なものとなっていた可能性もあるだろう。

30) カダグ・ビドが出した他の手紙（文書 da, dc, dd, de）にも同じ文言が見えている [cf. BD II: 246]。決まり文句だったのだろう。

この翻訳からは、カダグ・ビドの Keraw Ormuzdan が発した命令に対して、書記の Spiy が権限を与えているようにみえる。また Sims-Williams は、バクトリア語の人名録において、この Spiy のことを “a scribe who “authorizes” a letter for the governor Keraw Ormuzdan” と説明している [Sims-Williams 2010: no. 451]。次頁の表に示したように、これ以外の文書では、記録官 (*σρολαρο*) の Waraz-bursam (文書 dd), 肩書を持たない Mir-bandag (文書 de), Murwand (この語については後述する) の Mir-bandag (文書 ea), そして補給長官? (*ναβαραγοβιδο*³¹⁾) の Keraw (文書 ed) が、文書 cr の書記と同じ役割を担っている³²⁾。そして、Sims-Williams はこれらの人物に対しても、先の Spiy と同様の説明をしている [Sims-Williams 2010: nos. 210 (v), 255 (iii, iv), 309]。

もちろん、Sims-Williams は、書記などが、カダグ・ビドよりも高位にあったと考えている訳ではないだろう。しかし、前節で見たように、カガグ・ビドの地位は、クシャーン・シャーに匹敵する極めて高いものであり、筆者は、この *παροαναγο* が「権限付与、権限」という非物質的な意味を持つという理解が正しいとしても、その権限の所在は、書記などではなく、あくまでカダグ・ビドにあり、高位のカダグ・ビドが発した命令に対して下位の者が権限を与えているように読める上掲の翻訳には改善の余地があると考えている。実際、この語を含む一文は名詞の羅列であり、翻訳者の解釈次第で様々な訳文が出来上がる。以下この点について、他の言語資料を参考にいくつかの可能性を考えてみたい。

2 近世ペルシア語 *parvāna* との関係

Sims-Williams は、*παροαναγο* について解説する際、ムガル朝時代の近世ペルシア語行政文書に現れる *parvāna* “edict issued by an authority at the central government, based on royal orders” を参考にしている [BD II: 252a]。筆者が気づいた範囲では、ニザーム・アル=ムルク『統治の書 (諸王の行状)』15章に見える事例が興味深い (下線と丸括弧は筆者による)。

ディーワーンと国庫には、領地やイクターの重要事、あるいは下賜について口頭で発せられた命令 (parvāna) が常に届く。この命令のうちのいくつかは [王の] 気分が高揚しているときに出されたかもしれないが、これは微妙な事柄で、十分な注意が必要である。[命令を] 伝達する者たちの間で食い違いが生じたり、あるいはあるべきようには受け取ってもらえないこともあるだろう。この命令伝達は一人の人間によって行われ、しかもその人物は代理ではなく自分自身の口で伝えることが必要だ。さらに、たとえこの命令が届けられてもその旨が別の方法で³³⁾ディーワーンから王に報告されないうちは、

31) この肩書に関しては、Sims-Williams 2015: 262 n. 34 も参照。

32) 表にはカダグ・ビドが差出人の手紙全点に関する情報を記載している。

33) この部分については、「別の方法で」ではなく、「再度、もう一度」と訳す方が良いという提案

表1

| 文書 | バクトリア紀元 (西暦) | 差出人 (称号など) | 受取人 (記載順) | 内容 | παρονομαγο と 併記される人物 (肩書など) | 備考 |
|----|---|---|---|---|-----------------------------------|-------------------------------------|
| cr | 157年 Spandarmid月 (380年7/8月) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Bab Mir-spal Bandag Wind-sanag N[...]bandag | Ziy Mirbandagan に穀物の借りがある (or Ziy が穀物を借りている) ので、彼にワインを与えるように命じる | Spiy (書記) | |
| da | 198年 Adur月 (421年4/5月) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Biyān-bid Pesh-lad WibriyNabag Dog | 詳細不明 何らかの税・義務 (οαργο) に関わる内容 | | カダグ・ビド自身の命令 |
| db | ? (420頃) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Biyān-bid Pesh-lad WibriyNabag | 穀物に関わる内容 | | |
| dc | ? (420頃) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Biyān-bid Pesh-lad NabagWibriy Dog | 干草の貯蔵倉を作るように命じる | | |
| dd | 198年 Dadu月 (421年5/6月) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Biyān-bid Asp-yunPesh-lad AsbidNabagWibriy Dog | 馬を連れて Sag の息子 Shabur に干草を与えるよう命じる | Waraz-bursam (記録官) | 封印現存 |
| de | 199年 Ab月 (422年3/4月) | Keraw Ormuzdan (カダグ・ビド) | Benabid (=Biyān-bid) Wibriy (?) | 不明 | Mir-bandag | カダグスターン初出 |
| ea | 239年 Sharewar月 (461年12月/ 462年1月) | Meyam (カダグの王, カダグ・ビド) | Briyog Das SpalfKafan | カダグ・ビドが Shabur Peshladan に人 (奴隷), 土地などを与えた Deyag Peshladan (恐らく Shabur の兄弟) の借金は Deyag 自身に要求し, Shabur の財産に手を出さないように命じる (Shabur は Deyag の連帯保証人になっていた?) | Murwand (?) の Mir-bandag | |
| ed | 252年 Mihr月 (475年1/2月) | Meyam (カダグの王, カダグ・ビド) | Zarwe Das Spalb (=Spalf) Dog | Shabur-ormuzd がやって来て, Angad-spal に女 (奴隷) を値段を付けて渡したが代金が支払われない, と訴えた Shabur に女を返すべきだ, と命じる | Keraw (補給長官?) | |
| ja | ? (485年頃) | Kilman (カダグの王, カダグ・ビド) | Aba [gan?の主] | カダグ・ビドの僕の Zhun-bandag が, Tos (or Tos-boz) には借金があるのに支払わない, と訴えた | | |
| Y | 549年 (771/772年) | Kera-tonga Tonga-spara (カダグの王, カダグ・ビド) | | Mir の息子 Bek が, 立ち去った兄弟 Bab の借金や諸々の問題の免除を訴えたカダグ・ビドはそれを受け入れ, その旨を記した同意書を発行した | | * Kurwad の出納官 Oz, 施行者 (λίστοληραγο) |

それに基づいて業務が執行されることはないように [すべきであろう]。[井谷・稲葉 2015: 110]

近世バルシア語の parvāna は様々な意味を持つが, ここでは, その内容に基づき, 「口頭で発せられた命令」を意味したと考えられている³⁴⁾。これをそのままバクトリア語に適用す

↙ がある [藤井 2018: 390]。

34) Cf. Steingass 1892: 245b. この語は, 同時代の文献『カーブースの書』でも同じ意味で用いられ, ルーム・セルジューク朝の宮廷では特定の官職を指したという [井谷・稲葉 2015: 329 n. 171]。parvāna, あるいはこれをテュルク語の接尾辞-çi/-ci で拡張した parvānaçi が, モンゴル

ることは危険かもしれないが、parvāna が最上位の王の発した命令であったという点は、バクトリア語の *παροαναγο* もカダグ・ビドが発した命令を指していたと推測する根拠の1つになる。さらに、パルティア語の *prw'n* 「～の面前で (in front of)」という単語を考慮に入れば、バクトリア語の *παροαναγο* も「口頭で発せられた命令」と近い意味を持っていた可能性は高いと言える³⁵⁾。よって、カダグ・ビドの手紙に現れる「人名・肩書+*παροαναγο*」が示すのは、その人物が、手紙に記されている事案に関して、カダグ・ビドから直接命令を受けたという状況であったと考えることができる。そうすると、前項で見た文書 cr の、 σ [π]ω λαβωρο παροαναγο という一文は、“S[pi]y(?) the scribe (got/received) the oral order” 「書記 Spiy (が) 口頭の命令 (を受けた)」のように翻訳できるかもしれない。

ただし、ここで注意しなければならないのは、カダグ・ビドの手紙の中に、自身が直接命令を下したことが明記されている文書 da が存在することである。先に引用した文書 cr の差出人 Keraw Ormuzdan と同名の人物 (恐らく両者は祖父と孫) が発したこの手紙には、他の文書で「人名・肩書+*παροαναγο*」の並びが記されている箇所、次の一文が見える：*χορηο χοαδο φρομαδο* “Ordered by the lord himself” [BD II: 100-101]。これを考慮に入れると、上のように、*παροαναγο* をカダグ・ビドが発した口頭の命令と考えるよりも、Sims-Williams のように「権威」と訳し、その人物がカダグ・ビドに代わって命令していたと考える方が良いかもしれない³⁶⁾。ただ、これらの2種類の文言は、命令伝達のプロセスにおける何らかの違いを表しているかと推測できるが、詳しいことはわからない。

3 ソグド語 *prw'nk'* とガンダーラ語 *pravāṃnaga* との関係

次に、周辺地域の言語資料の中に、*παροαναγο* の比較対象となり得る言葉がないかどうかを探ってみたい。筆者が気づいた範囲では、8世紀前半のソグド語資料 (ムグ山文書) に *prw'nk'-kr'k* という肩書がある³⁷⁾。

ベンジケントの領主 (721年以降はソグドの王にしてサマルカンドの領主) デーワーシュティーチュの管轄下における様々な出費を羅列している文書 A-5 には、この肩書を持つ者 (人名は記されていない) が8ドラクマを受け取ったことが記されており、Livshits はこれを「法令・文書の編集者 (compiler of decrees or documents)」と翻訳している³⁸⁾。もとも

↙ 時代以降も君主の側近として重要な役割を果たしていたことについては、久保 1997: 157-159 を、口頭の命令 *parvāna* が最終的に文書化され、ティムール朝時代の書式例が確認されていることについては、久保 2016: 69 n. 54 を参照。

35) この考えをご教示頂いた査読者に感謝申し上げたい。パルティア語の単語については、Durkin-Meisterernst 2004: 280a を参照。

36) その場合、「人名・肩書+*παροαναγο*」は、Sims-Williams の翻訳を少し改変し、“on the authority (delegated/entrusted to) someone” とすれば良いだろう。

37) この語は *prw'nhk-kr'k* とも読める [cf. Bogoljubov & Smirnova 1963: 51, 97; Gharib 2004: 291b-292a]。ここでは、ひとまず Livshits の読みで表記しておく。

38) Livshits 2015: 161-166, 185 esp. 164。Livshits はこの語の翻訳に際して、先の近世バルシア語

と *prw'nk'-kr'k* は、「*prw'nk'* をする・作る (人)」を意味するので、彼は *prw'nk'* を法令・行政命令 (decree) や文書 (document) と考えていたことになる。この考えが正しいとすれば、バクトリア語の *παροαναγο* も、法令や勅令などを記した文書といった、形あるものであった可能性が浮上する³⁹⁾。

この点に関連して、ニヤのガンダーラ語資料の中で「文書」を指す言葉として使用されている *pravamṇaga* にも注目したい。この語は、サンスクリット語の *prapanna* (<*pra* √ *pad*) との関係が想定されているが、異なる意見もありはっきりとしない [DG: *pravamṇaga*; cf. Burrow 1937: 107; 山本 1996: 109 n.11]。ガンダーラ語では、*pravaja*~*parvaja*, *pravayadi*~*parvayadi*, *pravayida*~*parvaida* のように、接頭辞の *pra-* と *par-* が *v-* の前で入れ替わる例が見られる⁴⁰⁾。また、ニヤのガンダーラ語資料には、*pravamṇaga* 以外に、*-vamṇaga* という形で終わる単語が2つ、すなわち *thavamṇaga* (およびこれと関係する *kaṭahavamṇaga*, *havamṇaga*) と *sṗaṣavamṇaga* が存在し、単なる偶然かもしれないが、どちらもイラン語に由来すると考えられている⁴¹⁾。よって、ここでは *pravamṇaga* と *παροαναγο* が関連すると仮定して、考察を進めてみたい。

この *pravamṇaga* は「証書、文書 (deed, document)」などと訳される。他にも、*ganamṇa-*「会計 (accounting)」, *lekha-*「手紙、文書 (document)」, *rayakaūṭi-*「王家の駱駝」という語と結びついた形も知られており、全てを含めると実に多くの用例がある⁴²⁾。これら全てに共通する特徴を見いだすことはできないが、売買契約文書の事例を見ると、そこで扱われているのは、(ワインを入れる) 壺、土地、葡萄畑、人 (奴隷) などである⁴³⁾。つまり、*pravamṇaga* で扱われているのは、鄯善国が管轄していたと思しき事物であり、この語が契約文書を指す場合、それは権力者の認識の下で契約が成立したこと証明する公的な

↙ *parvāna* のほか、中期ペルシア語の *parwānag*, シリア語の *parwānqā*, アラビア語の *barwāna*, *furānīq*, タジク語・ウズベク語の *parvonači* を参考にしている。

39) ムグ山文書とバクトリア語文書との関連でいえば、手紙に記された紀年が興味深い。バクトリア語の手紙の中で紀年を有するのは、カダグ・ビドの直接命令に言及する文書、そして *παροαναγο* に言及する5点の文書、つまり、全てカダグ・ビドから送られた手紙である。一方、ムグ山文書には、デーワーシュティーチュが配下の執務官 (*pr'm'ndr*) へ宛てた手紙の1つ (文書 A-16) に日付があり、そこには彼が手紙に封印をし、その写しを作らせたことが記されている。カダグ・ビドの手紙に記された紀年も、写しが作られた日付であったかもしれない [Livshits 2015: 115-118; cf. Yoshida 2019: 52 n. 59]。ソグドの執務官、およびトハリストーンにおける同語源の肩書については、宮本 2018b を参照。

40) これらは全て DG を参照した。ただし、多数ある用例の中に **parvamṇaga* という形は知られていない。

41) Burrow 1934: 512-513。これらの語には、*pravamṇa*, *kaṭathavamṇa*, *sṗaṣavamṇa* という接尾辞のつかない形もある。

42) CKD 59, 72, 81, 86, 100, 159, 180, 275, 278, 289, 348, 369, 370, 416, 419, 443, 549, 571, 573, 579, 580, 582, 586, 587, 589, 590, 633, 648, 654, 655, 710, 715, 782, 795, 805

43) 山本光朗は、売買契約文書で扱われるものは国の租税対象であったと指摘している [山本 1996: 108-109]。

書類ということになるだろう⁴⁴⁾。

ソグド語とガンダーラ語の事例を参考にする、カダグ・ビドの手紙に見える「人名・肩書+*παροαναγο*」は、その人物がカダグ・ビドから受けた命令を記した公的書類を起草した、あるいはその発行に立ち会ったことを示していると考えられることもできる。この場合、本節の冒頭で見た *σ[πι]ω λαβιρο παροαναγο* という一文は、“S[pi]y(?) the scribe (drew up) the deed” 「書記 Spiy (が) 証書 (を作成した)」のように翻訳できるだろう。*παροαναγο* は、上で見た手紙そのものを指すか、あるいは手紙とは別の文書を指すか、どちらの可能性もあるが、ここでは、前節で言及した吉田の研究でカダグ・ビドが発した手紙の1つに数えられている文書 Y に注目し、後者の可能性について考えてみたい [BD I²: 142-143]。

この文書は、冒頭に *ασο* 「～から」という前置詞があり手紙のように見えるが、通常、差出人の後に記される受取人の名前がなく、実際は、吉田が説明するように、カダグ・ビドの Kera Tonga Tonga-spara から、ローブ南方のマドル付近にいた Bek の息子 Mir なる人物に発行された赦免状であり、いなくなった兄弟 Bab の負債を支払わなくてもよいということが長々と記されている⁴⁵⁾。つまり、この文書は、カダグ・ビドから発されたものではあるが、通常の手紙とは異なり、Mir が保管すべき公的な書類であったと言える。*παροαναγο* とは、この文書 Y のようなものを指している可能性はないだろうか。

ここでもう1点参考になるのが、カダグ・ビドが発した別の手紙 (文書 ea) である。こ

44) ただし、CKD 591 は奴隷売買文書であるが、pravamnaga ではなく、lihitaga 「書かれた (もの)」と呼ばれており、この呼び方の違いが何を意味するのか、筆者にはわからない。こうした事例は他にもあり、葡萄酒の売買について扱った2つの契約文書 (CKD 419 と CKD 581) は、前者が pravamnaga、後者が hastalekha 「手書き文書」と呼ばれている。しかし両者は、木簡の形状、および書式が共通しており、違いが見られない。あるいは、lihitaga や hastalekha は、どこかの場所で正式に承認されるなど、何らかの手続きを経て、pravamnaga となったのだろうか。この問題については、別の機会に詳しく調査することとしたい。なお、ニヤのガンダーラ語資料では、契約文書ではなく、種々の訴訟などに関わる文書は、基本的に lihitaga/lihidaga と呼ばれている。また、文書そのものを指す単語として、他にも *paṭi* 「板 (tablet)」や *lekha* などがある。

45) 吉田、および Sims-Williams と de Blois が、バクトリア語文書、および同時代のアラビア語文書から判明する Mir を含む一族の系図を作成しているが、それらはやや異なる [吉田 2013: 52-55; Sims-Williams & de Blois 2018: 37-39]。吉田は、アラビア語文書に登場する Mir ibn Bék al-Bāmiyāni (バクトリア語文書 Y の Bek の息子 Mir と同一人物) と同じニスバを持つ Meham al-Bāmiyāni (アラビア語文書 23) を、Mir と同じ世代の一族に加えている。地名ニスバが同じ一族に属することを示すかどうか定かではないが、そもそもこのアラビア語のアーカイヴのほとんどが Mir の一族のものであることを考えれば、その可能性は十分あるだろう。吉田はさらに、バクトリア語文書 je に登場する Meyam を、Meham al-Bāmiyāni の祖父と想定しているが、Sims-Williams たちが考える文書 je の年代 (465~475 年頃) が正しいとすれば、この考えは成り立たない [Sims-Williams & de Blois 2018: 73]。一方、Sims-Williams と de Blois が示す家系図の特徴は、バクトリア語文書 Y などに登場する Mir の兄弟 Kamird-far をアラビア語文書に登場する Sa'id と同一視している点にあり、この考えは、Kamird-far の -far (*φαρο*) と Sa'id が共通の意味を持つことに基づいている。これが正しいとすると、文書の年代から、この人物は 750~755 年の間に改宗したことになり、被征服民の明確な改宗時期を示す事例として興味深い。

れは、Shabur Peshladan なる人物が兄弟 Deyag Peshladan の借金を肩代わりしないで済むように命じたものであり、その主旨は基本的に文書 Y と同じである。しかし、文書 ea はその発行対象が文書 Y と異なっており、受取人は、Deyag の負債を Shabur に要求したと思しき複数の人物である。実際には Shabur に対して上の文書 Y のような赦免状が発行されていて、それが *παροαναγο* であった、と想像することはあまりにも無謀だろうか。カダグ・ビドから発せられた文書のうち、文書 Y を除く 9 点は手紙に典型的なフォーマット 3 であるが、文書 Y だけはフォーマット 2a であり、両者の性質が異なっていたことを示唆する⁴⁶⁾。

なお、文書 Y には、末尾に記された紀年の直前に次のような一文が見える：*οδο λιστοληραγο πιδδου σαχοανο ωζο κοροαδο νομαρογαρ* “And the enforcer in respect of this agreement (is) Oz, the treasure of Kurwad”。カダグ・ビドの発した手紙の中で、*παροαναγο* の語と併記されていた人物は、ここでいう *λιστοληραγο* 「施行者・執行者 (enforcer)」と同じような役割を果たしていたのかもしれない⁴⁷⁾。

4 文書 ci に見える *παροαναγο*

ところで、*παροαναγο* は、上述した 5 点の手紙以外にも、別の手紙（文書 ci）に 1 度だけ現れる。まずは Sims-Williams のテキストと翻訳を引用してみよう（下線は筆者）。

⁽¹⁾ *Αβο βαγωωρομοζδο βαγατανο χοηο ναζαρο βηοαρο λροδο ναμωσο α⁽²⁾σο γαρσογο υωστιγο*
χοβο μαρηγο οτανο οαλο βαταρανο καλδανο αβο ⁽³⁾το χοηο χοαδο λρογο οηανο
μισιδο αγαδο μαρο ασο το χοηοι πωστογο ⁽⁴⁾ταδομο ναγατο σαγωννδο ναβιχτημο κοαδανο
νασαζο χαραγανο αβο ⁽⁵⁾χοηοι πιδοοαναδηο κοαδο αβο ιαχροοιολο ζαμγο αστημο σιδο ⁽⁶⁾
ιαπισοδαρο οαβολανζο ασταδο ταδοιηο φαραμαγο λανηιο ταδο ⁽⁷⁾χοηοι ασο νασαζο
πιδοοανανο ναγατο οτο ζαμγο φαρο νασαζο ⁽⁸⁾φρομαδο λαδο οτουηιο αβο το χοηοι

46) ただし、現存する最も新しいフォーマット 3 の手紙は、Sims-Williams らによって 485~579 年という年代が与えられている文書 xq である [Sims-Williams & de Blois 2018: 78, 83]。よって、カダグ・ビドの発する公的書類の形態が時代と共に変化した、つまり上で述べた文書 ea と文書 Y が実質的には同じ種類の文書であった可能性もある。バクトリア語文書の書式全般については BD III: 9-10 を、フォーマット 3 については特に吉田 2013: 47-49 を参照。なお、文書 Y に見えるインデントを持つ書式は、ソグドからトハーリスターンに伝わったものである [吉田 2013: 48; Yoshida 2019: 49 n. 52]。7 世紀後半以降のトハーリスターンに現れるソグドからの影響については、宮本 2020: 93-95 も参照。

47) 文書 T の末尾には、カダグスターンの軍司令官であり、Warlu (=活路) の主である Baralbag なる人物がこの文書の「施行者・執行者」として記されている [BD I²: 102-103]。この文書は、カダグスターンに嫁いだハラジュ族の王妃が、息子の病を癒してくれた神官に対して土地と女奴隷を贈与したことの証書である。この文書は、バクトリア語の契約文書に典型的な、1 枚の書写材料に同じ文章を 2 度書く書式（フォーマット 1）であり、先の文書 Y とは書式が異なる。しかし、カダグスターンのトップから発せられた文書という点、そして末尾に「施行者・執行者」の名前が記されているという点で共通している。この文書も *παροαναγο* であったかもしれない。

*παροοαναγο λαδο ταδο το χο⁽⁹⁾ ηοι χοαδο ρυηιο ζαναδο κοαδο ασο χοηναγγο καδγο ναωγο
καβιζ⁽¹⁰⁾ο αιοι λανινδο οδο ναωγο σαγο μολο φαρο κοαδο μολραγο ταβδογο⁽¹¹⁾ ναβαρηιο
υορζανο ζαμγο ασο αλδομο ναοα⁽¹²⁾ζο ασο χοηοι πωστογο αβαραδο πιδο λοοι μολρο⁽¹³⁾
ταδοηιο αζο οιζανδο ναβαρανο ασιδοηιο να⁽¹⁴⁾μοπαλο ζαμγο λανανο
⁽¹⁵⁾Αβο βαγωωρομοζδο ⁽¹⁶⁾βαγατανο χοηο λροδο ⁽¹⁷⁾traces*

⁽¹⁾To Bag-ohrmuzd Bagatan the lord, a thousand (and) ten thousand greetings (and) homage from ⁽²⁾Garsug the *hostig*, his servant. And then I would be more happy when ⁽³⁾I myself might see your lordship healthy.

Moreover, a letter has come hither from your lordship, ⁽⁴⁾so I have heard how (your lordship) has written to me, that Nawaz Kharagan ⁽⁵⁾has appealed to the lord (saying): “At Yūkhsh-wīrl there is a (piece of) land which ⁽⁶⁾was formerly a hayfield and you should give it to me”. Then ⁽⁷⁾the lord listened to the request (made) by Nawaz and ⁽⁸⁾ordered the land to be given to Nawaz; and he gave it on your lordship’s authority. Your ⁽⁹⁾lordship yourself ought to know that they do not give one quart of grain from the lord’s house, ⁽¹⁰⁾nor one gallon of wine, to (anyone) who does not bring a sealed document, ⁽¹¹⁾let alone a (piece of) land! But if Nawaz ⁽¹²⁾brings me a document with two seals from the lord, ⁽¹³⁾then I will not do him any injury but ⁽¹⁴⁾will give him the land immediately.

⁽¹⁵⁻¹⁷⁾To Bag-ohrmuzd Bagatan the lord, greetings . . . [BD II : 84-85 ; cf. BD III : pls. 146, 147]

この手紙の大枠は、差出人 Garsug が、Nawaz Kharagan なる人物の土地の受領に関わる事案について、受取人 Bag-ohrmuzd Bagatan に伝える、というものである⁴⁸⁾。ここでは、

48) 差出人 Garsug が帯びる *hostig* (ωοστιγο) という肩書は、接尾辞 *-ano* が付された ωοστιγανο という形も知られているが、Sims-Williams はどちらも意味と語源を提示していない [BD II : 273b]。この手紙以外に、別の *hostig* が出した手紙 (文書 ee) にも、ωαιδο ζαμα(ν)οι πωστιγο ανηδδο ταδο ι μολρογο ταβηδδο “Now, as soon as you see this letter, you should seal the sealed document” という文言が見えることから、この肩書きを持つ者と封印が付された文書との間には強い結びつきがある。ここでは、この語に関連する可能性の1つとして、アルメニア語資料に見える中期ペルシア語からの借用語 *ostikan* に注意を喚起しておきたい [Hübschmann 1897 : 215-216]。この語は、「監督者、管理人、長官」などを意味し、行政機構に属する役人を指す言葉として資料中に登場する [Garsoian 1989 : 551 ; Thomson & Howard-Johnston 1999-II : 328]。この事例を参考にすれば、バクトリア語文書の *hostig* も、アルメニア語 *ostikan* と類似の意味を持ち、国庫の管理人のような役割を果たしていたと考えることができるかもしれない。さらに、クシャーণ朝時代の新出舍利容器も参考になる [Falk and Sims-Williams 2017]。この舍利容器の側面には、2体の坐仏と、坐仏を中心に向かい合う2組の人物 (合計4人) が、バクトリア語の銘文と共に描かれている。4人とは、クシャーण王ヴァースデーヴァ, karalrang の Narkas, *hostig* の Rām, そして何の肩書も持たない Humyug-āgād である。クシャーण王, および高官 karalrang と共に描か

この手紙の解釈にとって重要となる2つの点について確認しておきたい。まずは、主文（上掲テキスト・翻訳の2段落目）に言及される *χορη* “the lord” 「主」が誰かということである。この人物は、受取人 Bag-ohrmuzd と同一人物か、あるいはここには名前が記されていない別の人物かどちらかである。手紙の冒頭と末尾の宛名書きでは、受取人 Bag-ohrmuzd が「主」と呼ばれており、受取人と主文中の「主」を同一人物とみなすことができる。一方、主文において差出人 Garsug が受取人 Bag-ohrmuzd に言及する際には、常に *το χορη* “your lordship” 「貴方様」という表現を用いているので、Bag-ohrmuzd と主文中の「主」を別人とみなすことも可能である⁴⁹⁾。

次に、問題の *παροοαναγο* であるが、Sims-Williams はこの語を含む一文（上掲テキスト・翻訳中の下線部を参照）を次のように翻訳している：*οτοσηο αβο το χορηοι παροοαναγο λαδο* “and he (i. e. the lord, R. M.) gave it (i. e. the land, R. M.) on your lordship’s authority”。しかし、主文の後半部（11～14行目）を見ると、Nawaz Kharagan にはまだ土地が与えられておらず、この翻訳では筋が通らない⁵⁰⁾。

そこで筆者は、別の可能性として、受取人 Bag-ohrmuzd と主文中の「主」を別人であるとみなした上で、この一文を次のように翻訳したい：“he (i. e. the lord) gave *παροοαναγο* to your lordship”。Sims-Williams の研究によれば、バクトリア語では、動詞が2つの目的語をとる場合、その間接目的語は特定の前置詞によって示され、無生の場合は前置詞 *αβο*、有生の場合は前置詞 *φαρο* が用いられるので、この規則に反する筆者の翻訳は成り立たないようにみえる [Sims-Williams 2011: 30-35]。しかし、有生の間接目的語が前置詞 *αβο* で示される例は存在する（文書 xa 6～8行目）：*ταδομο πιδο πωστοβαργο αβο το χορηο νιταδο* “I have sent it to your lordship by the bearer of (this) letter” [BD II: 140-141]。また、クシャーン朝時代のラバータク碑文（22行目）にも同様の例が見られる：*[καν]η[βκε] βαι μα λιζα αβο βαγανο λαδο* “King [Kanishka] gave the fortress to the gods” [Sims-Williams 2008: 57; cf. idem 2011: 36]。よって、筆者の翻訳には十分根拠があると思われる⁵¹⁾。

↙ れていることから、hostig もかなりの高位にあったはずである。ただし、この資料の制作には宗教的な背景が想定され、世俗的な文脈で扱う資料ではないかもしれない。なお、karalrang が登場するクシャーン朝期のバクトリア語碑文については Sims-Williams 2012d を、称号そのものについては Henning 1965: 77-79 を、karalrang が所有した銀器については、Sims-Williams 2013: 197 を参照。

49) Sims-Williams は、両者を同一人物と考えているようである [Sims-Williams 2010: no. 57]。

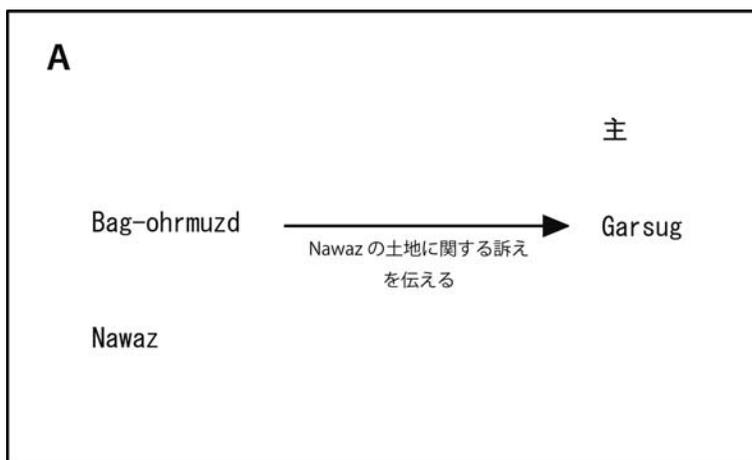
50) あるいは、“and he (supposedly) gave it on your lordship’s authority” と訳せば問題ないかもしれないが、その場合は、冒頭の接続詞は仮説の意味を持つ接尾辞 *-avo* が付された *οτουανο* となり、動詞は *λαδηο*（希求法過去・3人称単数）となることが期待されるのではないだろうか。例えば、文書 bg（11～12行目）の次の一文を参照：*ταδανο [το] χορηο πιδονωγαρο φαρο χοαδηοσανινδο λαδηο* “[your] lordship again (supposedly) gave it to Khwadew-wanind” [BDII: 64-65; cf. Sims-Williams 2011: 33]。

51) 文書 ci と xa は共に、バクトリア語の手紙の中では古い時代に属するものなので、より古い時代の特徴が保持されているのかもしれない。文書 xa の年代については、Sims-Williams & de Blois 2018: 75 を参照。

これまで見てきたように、*παροαναγο* が、口頭の命令、あるいはそれについて記した証書の可能性があるなら、この文書 ci の一文は、より具体的に「彼（主）は貴方様に口頭の命令/証書を与えた」“he (i. e. the lord) gave the oral order/the deed to your lordship”と訳すこともできるだろう。そして、これらの筆者の解釈と翻訳案をもとに、この手紙で語られている筋書きを説明するなら、次のようになるだろう（図も参照）。

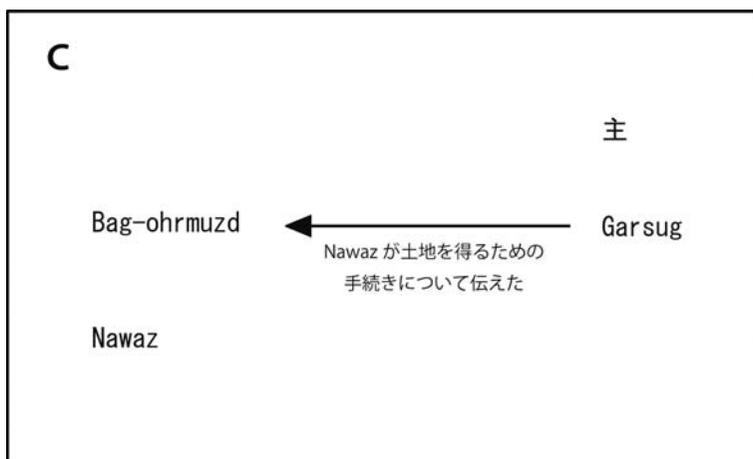
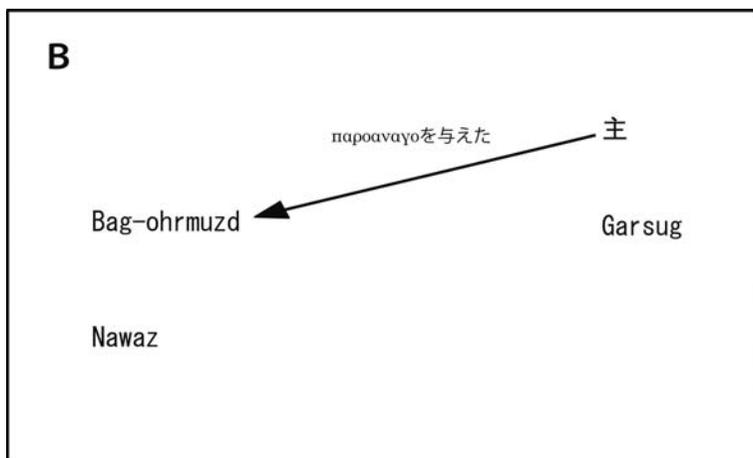
- A：この手紙より以前、土地に関する Nawaz の訴えを主に伝えるため、Bag-ohrmuzd が Garsug に手紙を書いていた
- B：訴えを聞き入れた主が *παροαναγο* を Bar-ohrmuzd に与えていた
- C：この手紙（文書 ci）で、Garsug が Bag-ohrmuzd に対して、Nawaz が土地を得るための手続きについて伝えた⁵²⁾

Nawaz が帯びる Kharagan という形容辞・家名は、彼が khār に連なる家系、つまり在地の貴族階層に属していたことを示している。またこの人物に関しては、別の文書から、ローブへ人を送ったこと（文書 cf）、バーミヤーンの城砦から離れた人を受け入れて欲しいと要求されたこと（文書 cg）、さらには、「城砦長 (*λιξοβιδο*)」の称号を帯び（文書 cp）、ローブと離れた城砦で活動していたことがわかっている⁵³⁾。上の筋書きが正しいとすると、Bag-ohrmuzd は Nawaz よりも上位にあったことになり、手紙には記されていないものの、



52) あるいは、手紙の主文からはわからないが、B の後に、何らかの理由で *παροαναγο* が Bag-ohrmuzd から Nawaz に渡らず、Nawaz はそれを持たずに Garsug のもとに赴いたため土地が与えられなかった、という状況があったかもしれない。その場合、筋書き C は、Garsug が Bag-ohrmuzd に、正しい手続きを執るよう注意したものと考えられる。

53) Nawaz を含め、Kharagan については、宮本 2018a: 53-55 を参照。



この人物がローブの *khār* であった可能性もでてくる。一方、Nawaz に土地を与えることが可能な「主」とはどういう人物だろうか。この手紙は、380年に書かれた文書Cと同時代のものと考えられている [Sims-Williams & de Blois 2018: 49-50, 69, 82]。これは「主」の候補としてカダグ・ビドの存在を想定しても良い時代であり、筆者はその可能性があると考えている。その理由として、まず、*παροαναγο* が言及される他の全ての文書がカダグ・ビドの発した手紙であることが挙げられる。また、この手紙の最後には、「主」の発行した2つの封印が付いた文書を持参すれば Nawaz に土地が与えられると記されており、カダグ・ビドと同等の地位にあったクシャーン・シャー（あるいはその一族）から出された手紙（文書 ba）が、そこに開いた穴の数から、もともと2つの封印を持っていたと考えられていることもその理由の1つである⁵⁴⁾。

54) ただし、文書 ba は土地に関わる事案を扱ったものではない [BD II: 52-55]。また、*παροαναγο* ↗

筆者のここまでの議論が、推測の上に推測を重ねた危険なものであることは承知しているが、本稿の目的は新しい解釈の可能性を提示することにあるので、最後に、*παροαναγο* に関連する点でもう1つ指摘しておきたい。それは、文書 ea において、Mir-bandag という人名と *παροαναγο* の間に現れ、Sims-Williams が地名と考えている Murwandig (*μοροσανδιγο*) という語についての異なる解釈の可能性である⁵⁵⁾。

μοροσανδιγο を構成する **μοροσανδο* と接尾辞 *-ιγο* のうち、**μοροσανδο* は明らかに2つの要素から成っている。バクトリア語文書のグロッサリーを調べると、前半部の **μορο-*に近い言葉として、*μολρο* 「印章」に行き当たる [BD II: 235a]。*μολρο* は純粋なバクトリア語だが、バルティア語と中期ペルシア語には *mwhr* 「印章」という語があり、**μορο-*はそれと関係があるかもしれない [cf. MacKenzie 1971: 56; Durkin-Meisterernst 2004: 233]。*mwhr* をそのまま写せば **μορο* となるはずだが、*πουρο* と *πορο* 「息子」の例が示すように、バクトリア語では *v/h/* の音がしばしば落ちる (省略される) ので問題はない [cf. BD II: 258a]。後半部の **-σανδο* に関しては、所有を表す接尾辞 *-wnd* との関連が想定できる⁵⁶⁾。これらの推測が正しいとすれば、**μοροσανδο* は、印章の保持者を指す肩書であったと解釈できる⁵⁷⁾。

このような肩書が、様々な行政官の肩書を保持する中期ペルシア語の印章に残されていないことは不思議であるが、**μοροσανδο* はカダグ・ビドを指す尊称や雅称であった、と考えれば、サーサーン朝の行政印にこれが存在しないことを説明できるのではないだろうか。実際、カダグ・ビドの印章は存在している [Lerner & Sims-Williams 2011: 81-82, 193-194, 203]。*μοροσανδιγο* は語末に形容詞を形成する接尾辞 *-ιγο* が付されており、この接尾辞を持つ他の肩書、*λασοβιδιγο* 「十人隊員 (<十人隊長に属する)」や、*λιξοβιδιγο* 「城砦番 (<城砦長に属する)」を参考にすれば、これを、**μοροσανδο* (つまりカダグ・ビド) の配下にあった人物が帯びた肩書であったと考えることが可能だろう [cf. BD II: 164-165, 226a,

↙ に言及する手紙のうち、封印が残存している文書 dd のそれは1つである [BDII: 23-24]。与えられる物や扱われる事案と封印の数とが何らかの関係を持っていた可能性があるが、この問題については、封印の詳細が発表されてから改めて考察しなければならない。

55) この解釈は、筆者が別の論考 [宮本 2018a] を投稿した際に匿名の査読者から頂いた助言に基づき、改めて調査したものである。旧稿の査読者に心より謝意を表すると共に、本稿の以下の部分に含まれる誤りは全て筆者の責任であることを明記しておく。

56) この考えは本稿の査読者からのご教示による [cf. Durkin-Meisterernst 2014: § 358]。筆者はこの後半部を、バルティア語と中期ペルシア語の動詞 *bnd-* 「結ぶ、縛る」、あるいはその名詞形 *bnd* 「結合、つながり」に関連すると想定していた [cf. MacKenzie 1971: 17; Durkin-Meisterernst 2004: 108a]。どちらの動詞も古代イラン語 **band* に由来するが、例えばバルティア語の *pdnd* < **pati-band* と中期ペルシア語の *plwnd* < **pari-band* が示すように、母音間にくる **b* は、バルティア語では *b /β/* となり、中期ペルシア語では *w /w/* となるので、バクトリア語の **-σανδο* は中期ペルシア語に対応しているようにみえる [Durkin-Meisterernst 2014: § 254, 257; Cheung 2007: 4-5]。

57) ニサのバルティア語陶片文書には、*mwdrwrt/mwhrwrt* 「印章官 (seal-setter)」という肩書きがある [Diakonoff & Livshits 1977-2001: 197b]

227b]。

ちなみに、*παροαναγο* と併記される 5 人のうち、3 名が何らかの肩書を持ち、さらに *μοροσανδιγο* も肩書として解釈できるとすれば、残る 1 名、文書 de の Mir-bandag も何らかの肩書を持っていたのではないかと考えたくなる。しかし、この文書では、人名の直後に *παροαναγο* (実際はそのヴァリエントの *παροσηνα*[γο]) の語が来ており、肩書の入り込む余地は無い。また、人名の後半部分-bandag の箇所は非常に不鮮明だが、実際に文書を解読した Sims-Williams が、“the traces are faint but easily compatible with this reading” と述べているので、疑問を差し挟む余地はないようにみえる。ただ、発表されている図版からは彼の読みは確認できず、Mir という人名も在証されているので、この部分に何らかの肩書があった可能性も捨てきれない [BD II: 105 n. 140; BD III: pl. 169a; Sims-Williams 2010: no. 253]。

おわりに

バクトリア語文書の発見以後、トハーリスターンの歴史・地理・社会に関する我々の知識は大幅に増加した。前イスラーム時代の政治史を理解するために極めて重要なカダグスターンの発見も、そうした新情報の 1 つであり、それをもたらした Sims-Williams の研究の重要性はどれだけ強調してもし過ぎることはない。一方で、幸運にも彼の解読成果を利用できる我々は、その強固な基盤の上で、さらに研究を発展させなくてはならない。本稿で扱ったカダグスターンに関わる諸問題は、いずれも、断片的な資料を利用するがゆえに明確な答えを導き出すことはできなかった。しかし、それが最終的に正しいか誤っているかは別として、従来とは異なる新しい解釈を提示することで、研究が進展することは間違いない。今後もうこうした地道な作業を通して、中央アジアの歴史を少しずつ明確なものにしてゆきたい。

付記：本稿は科学研究費 (20K13198) による成果の一部である。

略号・参考文献

BD I²: Sims-Williams 2012a

BD II: Sims-Williams 2007

BD III: Sims-Williams 2012b

CKD=Corpus of Kharoṣṭhi documents in Baums & Glass 2002-b

DG=Baums & Glass 2002-a

Afram, M. (2014) “From the Sasanians to the Huns. The new numismatic evidence from the Hindu Kush”, *Numismatic Chronicle* 174, 261-291.

- Aram, M. (2016) *Das Antlitz des Fremden. Die Münzprägung der Hunnen und Westtürken in Zentralasien und Indien*, Vienna.
- アルラム, ミヒヤエル (宮本亮一 訳) (2017) サーサーン朝からフンへ: ヒンドークシュ南北で発見された新出貨幣資料 宮治昭 (編) 『アジア仏教美術論集』中央アジア I (ガンダーラ〜東西トルキスタン) 中央公論美術出版, 227-256.
- Aram, M. & M. Pfisterer (2010) "Alkhan and Hephthalites Coinage", in: Alram, M., D. Klimburg-Salter, M. Inaba & M. Pfisterer (eds.) *Coins, Art and Chronology II. The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Wien, 13-38.
- Bakker, H. (2018) "A Buddhist foundation in Šārdīysa. A new interpretation of the Schøyen copper Scroll", *IJ* 61, 1-19.
- Bakker, H. (2020) *The Alkhan. A Hunnic people in South Asia*, Groningen.
- Balogh, D. (ed.) (2020) *Hunnic peoples in Central and South Asia. Sources for their origin and history*, Groningen.
- Baums, S. & A. Glass (2002-a) *A dictionary of Gāndhārī* (<https://gandhari.org/dictionary> 2021 年 4 月 23 日閲覧).
- Baums, S. & A. Glass (2002-b) *Catalog of Gāndhārī texts* (<https://gandhari.org/catalog> 2021 年 4 月 23 日閲覧).
- Bogoljubov, M. N. & O. I. Smirnova (1963) *Sogdijskije dokumjenty s gory Mug III: xozjajstvjennyje dokumjenty*, Moskva.
- Burrow, T. (1934) "Iranian words in the Kharoṣṭhi documents from Chinese Turkestan", *BSOS* 7/3, 509-516.
- Burrow, T. (1937) *The language of the Kharoṣṭhi documents from Chinese Turkestan*, Cambridge.
- Cheung, J. (2007) *Etymological dictionary of the Iranian verb*, Leiden/Boston.
- Cribb, J. (2010) "The Kidarites, the Numismatic Evidence", with an Analytical Appendix by A. Oddy, in: Alram, M., D. Klimburg-Salter, M. Inaba & M. Pfisterer (eds.) *Coins, Art and Chronology II. The First Millennium C. E. in the Indo-Iranian Borderlands*, Wien, 91-146.
- Diakonoff, I. M. & V. A. Livshits (1977-2001) *Parthian economic documents from Nisa*, Text I, London.
- Durkin-Meisterernst, D. (2004) *Dictionary of Manichaean Middle Persian and Parthian*, dictionary of Manichaean texts III/1, Turnhout.
- Durkin-Meisterernst, D. (2014) *Grammatik des Westmitteliranischen (Parthisch und Mittelpersisch)*, Grammatica Iranica 1, Wien.
- 榎 一雄 (1955) ソグディアナと匈奴 『史学雑誌』 64/6-8 (引用頁数は『榎一雄著作集 3』汲古書院, 1993, 51-131 による).
- Falk, H. & N. Sims-Williams (2017) "A Decorated silver pyxis from the time of Vāsudeva," in Al. Cantera & M. Macuch (eds.) *Zur lichten Heimat. Studien zu Manichäismus, Iranistik und Zentralasienkunde im Gedenken an Werner Sundermann*, Wiesbaden, 121-139.

- 藤井守男 (2018) 書評：井谷・稲葉 2015 『イスラーム世界研究』 11, 387-391.
- Garsoïan, N. G. tr. (1989) *The epic histories attributed to P'awstos Buzand (Buzandaran Patmut'iwnk')*, Cambridge (Massachusetts).
- Gharib, B. (2004) *Sogdian dictionary*, Tehran (rep. with addenda and corrigenda).
- Golden, P. B. (1992) *An introduction to the history of Turkic peoples: ethnogenesis and state-formation in medieval and early modern Eurasia and the Middle East*, Wiesbaden.
- Grenet, F. (2002) "Regional interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephtalite periods", in: Sims-Williams, N. (ed.) *Indo-Iranian Languages and Peoples*, Oxford, 203-224.
- Grenet, F., J. Lee, P. Martinez & F. Ory (2007) "The Sasanian relief at Rag-i Bibi (Northern Afghanistan)", in: Cribb, J. & G. Herrmann (eds.) *After Alexander: Central Asia before Islam*, Oxford, 243-267.
- Gyselen, R. (2019) *La géographie administrative de l'empire sassanide. Les témoignages épigraphiques en moyen-perse*, Bures-sur-Yvette.
- Henning, W. B. (1965) "Surkh-Kotal und Kaniska", *ZDMG* 115, 75-87.
- Hübschmann, H. (1897) *Armenische Grammatik. I. Theil. Armenische Etymologie*, Leipzig.
- 稲葉 穰 (2011) 悟空(車奉朝)の入竺路について 船山徹(編)『中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性』科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書, 65-82.
- 井谷鋼造 (2011) オスマーン朝のハーカーンたち『西南アジア研究』74, 1-27.
- 井谷鋼造・稲葉 穰(訳注) (2015) ニザーム・アルムルク『統治の書』岩波書店.
- Karev, Y. (2015) *Samarqand et le Sughd à l'époque 'abbâsside: histoire politique et sociale*, Paris.
- 川崎浩孝 (1993) カルルク西遷年代考：シネウス・タリアト両碑文の再検討による『内陸アジア言語の研究』9, 93-110.
- Khan, G. (2007) *Arabic documents from early Islamic Khurasan*, London.
- 久保一之 (1997) ティムール朝とその後：ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き 杉山正明(編)『中央ユーラシアの統合』岩波書店, 147-176.
- 久保一之 (2016) Nizām al-mulk 著『統治の書』とティムール朝：イラン・イスラーム的政治文化の継承をめぐる『西南アジア研究』85, 40-72.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー=ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進 (1993) 6-8世紀 Kāpīsi, Kābul, Zābulの貨幣と発行者『東方学報』65, 371-430.
- 桑山正進(編) (1998) 『慧超往五天竺国伝研究』臨川書店.
- de la Vaissière, É. (2005) "Huns et Xiongnu", *CAJ* 49/1, 3-26.
- de la Vaissière, É. (2007) "Is there a "Nationality of the Hephtalites"?", *BAI* 17, 119-132.
- de la Vaissière, É. (2012) "A note on the Schøyen copper scroll: Bactrian or Indian?", *BAI* 21, 127-130.
- de la Vaissière, É. (2016) "KUSHANSHAHS i. History", *Encyclopædia Iranica* (<http://www.iranicaonline.org/>)

- iranicaonline.org/articles/kushanshahs-01 2021年4月23日閲覧).
- de la Vaissière, É. (2018) “L'ère kouchane des documents bactriens”, *JA* 306/2, 281-284.
- Lerner, J. A. & N. Sims-Williams (2011) *Seals, sealings and tokens from Bactria to Gandhāra (4th to 8th century CE)*, Wien.
- Livshits, V. A. (2015) *Sogdian epigraphy of Central Asia and Semirech'e*, London.
- MacKenzie, D. N. (1971) *A concise Pahlavi dictionary*, London.
- 前嶋信次 (1971) 「タラス戦考」『東西文化交流の諸相』東西文化交流の諸相刊行会, 129-200.
- Melzer, G. (2006) “A copper scroll inscription from the time of the Alchon Huns”, in: Braarvig, J. *et al.* (eds.) *Manuscripts in the Schøyen collection. Buddhist manuscripts* 3, Oslo, 251-278.
- 宮本亮一 (2012) バクトリア語文書中に見えるカダグスタンについて『東方学報』87, 448-413.
- 宮本亮一 (2014) 『バクトリア史研究』(課程博士論文), 龍谷大学 (<https://opac.ryukoku.ac.jp/webopac/TD00022030> 2021年4月23日閲覧).
- 宮本亮一 (2018a) バクトリア語文書から見たトハリスターン在地の支配階層『オリエント』61/1, 47-57.
- 宮本亮一 (2018b) *φρομαλαρο* と *pr̥m'nδr* : トハリスターンとソグドにおける在地役人の比較研究『東洋史研究』77/3, 1-34.
- Miyamoto, R. (2019) “Étude préliminaire sur la géographie administrative du Tukhāristān”, *StIr* 48/2, 163-186.
- 宮本亮一 (2020) ワフシュ神とラームセート神: バクトリア語文書から見たトハリスターンにおける宗教事情の一側面『東洋学術研究』59/2, 85-114.
- 森安孝夫・吉田 豊 (2019) カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳注『内陸アジア言語の研究』34, 1-59.
- 内藤みどり (1988) 『西突厥史の研究』早稲田大学出版会.
- 小谷仲男 (2019) 5世紀における西北インドのフーナ族『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2019, 1-20.
- ur Rahman, A. U., F. Grenet & N. Sims-Williams (2006) “A Hunnish Kushan-shah”, *JIAAA* 1, 125-131.
- Scherrer-Schaub, C. (2018) “The quintessence of the Mādhyamika teaching blossoms again. Some considerations in view of the 5th-7th C. A. D. (I) : reading the Alkhan's document (Schøyen MSS 2241) in religious and political context”, *JA* 306/1, 115-146.
- Schindel, N. (2011) “The era of the Bactrian documents: a reassessment”, *Gandharan Studies* 5, 1-10.
- Schindel, N. (2016) “KUSHANSHAHS ii. Kushano-Sasanian Coinage”, *Encyclopædia Iranica* (<http://www.iranicaonline.org/articles/kushanshahs-02-coinage> 2021年4月23日閲覧).
- Sims-Williams, N. (1997) *New light on ancient Afghanistan: the decipherment of Bactrian*, London.
- Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents*, Oxford.

- Sims-Williams, N. (2006) "Bactrian letters from the Sasanian and Hephthalites Periods", in : Panaino, A. & A. Piras (eds.) *Proceedings of the 5th Conference of the Societas Iranologica Europæa held in Ravenna, 6-11 October 2003, vol. 1 Ancient & Middle Iranian Studies*, Milano, 701-713.
- Sims-Williams, N. (2007) *Bactrian documents from Northern Afghanistan II : letters and Buddhist text*, London.
- Sims-Williams, N. (2008a) "The Sasanians in the East: A Bactrian archive from northern Afghanistan", in : Sarkhosh Curtis, V. & S. Stewart (eds.) *The Sasanian era, The Idea of Iran*, vol. 3, London/New York, 88-102.
- Sims-Williams, N. (2008b) "The Bactrian inscription of Rabatak : a new reading", *BAI* 18, 53-68.
- Sims-Williams, N. (2009) "KADAGISTĀN", *Encyclopædia Iranica* (<https://iranicaonline.org/articles/kadagistan-an-eastern-province-of-the-sasanian-empire> 2021年4月23日閲覧).
- Sims-Williams, N. (2010) *Bactrian personal names*, Iranisches Personennamenbuch II/7, Wien.
- Sims-Williams, N. (2011) "Differential object marking in Bactrian", in : von Agnes Korn, H., G. Haig, S. Karimi & P. Samvelian (eds.) *Topics in Iranian linguistics*, Wiesbaden, 23-38.
- Sims-Williams, N. (2012a) *Bactrian documents from Northern Afghanistan I : legal and economic documents* (revised edition), London.
- Sims-Williams, N. (2012b) *Bactrian documents from Northern Afghanistan III : plates*, London.
- Sims-Williams, N. (2012c) "New light on ancient Afghanistan : The decipherment of Bactrian", in : Hansen, V. (ed.) *The Silk Road : key papers*, Leiden, 95-114.
- Sims-Williams, N. (2012d) "Bactrian Historical Inscriptions of the Kushan Period", *The Silk Road* 10, 76-80.
- Sims-Williams, N. (2013) "Some Bactrian inscriptions on silver vessels", *BAI* 23, 191-198.
- Sims-Williams, N. (2015) "A new Bactrian inscription from the time of Kanishka", in : Falk, H. (ed.) *Kushan Histories. Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin December 5 to 7, 2013*, Bremen, 255-264.
- Sims-Williams, N. (2020) "The Bactrian documents as a historical source", in : Payne, R. E. & Rh. King (eds.) *The limits of empire in ancient Afghanistan. Rule and resistance in the Hindu Kush, circa 600 BCE-600CE*, Wiesbaden, 231-244.
- Sims-Williams, N. & F. de Blois (2018) *Studies in the chronology of the Bactrian documents from Northern Afghanistan*, Wien.
- Skjærvø, P. O. (1983) *The Sasanian inscription of Paikuli*, Part 3, 2 vols., Wiesbaden.
- Stark, S. (2016) "Türgesh Khaganate", in : MacKenzie, J. M. et al. (eds.) *The encyclopædia of empire*, vol. IV, Oxford, 2122-2127.
- Steingass, F. (1892) *A comprehensive Persian-English dictionary, including the Arabic words and phrases to be met with in Persian literature*, London.
- Thomson, R. W. & J. Howard-Johnston (1999) *The Armenian history attributed to Sebeos*, 2 vols.,

Liverpool.

Vondrovec, K. (2014) *Coinage of the Iranian Huns and their Successors from Bactria to Gandhāra (4th to 6th century CE)*, 2 vols., Wien.

山沢孝至 (訳注) (2017) アンミアヌス・マルケリヌス『ローマ帝政の歴史 1』京都大学学術出版会.

山本光朗 (1996) カロシュティエー文書 No. 571 について『北海道教育大学紀要』(第一部 A/人文科学編) 47/1, 101-111.

Yoshida, Y. (2003) Review of Sims-Williams 2000, *BAI* 14, 154-159.

吉田 豊 (2013) バクトリア語文書研究の近況と課題『内陸アジア言語の研究』28, 39-65.

吉田 豊 (2018) 貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配『京都大学文学部研究紀要』57, 155-182.

Yoshida, Y. (2019) *Three Manichaean Sogdian letters unearthed in Bāzāklīk, Turfan*, Kyoto.

吉田 豊 (2019) カラバルガスン碑文に見えるウイグルと大食の関係『西南アジア研究』89, 34-57.

吉田 豊 (2020) 9世紀アジアの中世イラン語碑文2件：西安出土のパフラビー語・漢文墓誌とカラバルガスン碑文の翻訳と研究『京都大学文学部研究紀要』59, 97-269.

(東京大学附属図書館)